

寄稿 インドでの生活 —刺激的な日常楽しんでます

インド政府奨学金留学生 小嶋常喜 大学院文学研究科史学専攻博士後期課程



▲指導教授のひとり、スイツィーキー教授と(左が筆者)

ジャワハルラール・ネルー大学(以下ネルー大学)はインドの首都ニューデリーの南部の郊外、世界遺産クトゥブ・ミナールを東南にのぞむ丘のうえにあります。大学の校舎、学生寮、教職員住宅、マーケット等が点在するこの丘一帯は深い森に覆われ、シカ、リス、クジャクといった多くの野生動物などの豊かな自然であふれています。ネルー大学は人文(芸術分野を含む)・社会・自然科学にわたる9つの学部に加え、バイオテクノロジーやサンスクリット研究などの独立した4つの研究センターを抱える国立の総合大学院大学で

す。国内外から多くの研究者と学生を受け入れ、インドの学問研究において中心的な役割を果たしています。

今年の1月から私はインド政府奨学金留学生として同大学社会科学部歴史研究センターの博士課程に受け入れられ、新たな環境のなかで研究活動を始めました。幸いなことに2人の素晴らしい指導教授とめぐり合うことができ、彼らの手厚い指導を受けることになりました。博士課程の学生は授業に出る必要はなく、私の研究活動はもっぱら図書館や公文書館での仕事です。現在はニューデリーでの史料調査とともに、4セメスター(2年)以内での提出と公開の場での報告が義務づけられる博士論文の計画書を作成中です。ただ指導教授との対話はもちろん大学内で頻繁に開催されるさまざまなテーマのセミナーや同じ寮に住むインドのみならず世界各地からの学生と交わす議論は非常に刺激的なもので、長らくインドの農民運動に特化して勉強を続けてきた私の狭い視野を大きく広げてくれます。

しかし、留学生生活を始めたばかりでまた27年間の生涯で単身生活が初めての私にとってはニューデリーでの日常のほうはまだ刺激的です。ひとたび大学を出れば、そこには大渋滞の中を歩く象や牛、乗客が少ないと突然運行を中止したり停留所でとまろうとしないので飛び乗らなければならなかったりする路線バス、全く並ぼうとしない人々が殺到している郵便局や銀行の窓口など私が暮らしてきた社会とは完全に異なる「秩序」をもって動いている社会があります。それは率直に言ってしまうと私に大変な苦勞を強いるものです。

今年の冬(1、2月)は東京とあまり変わらないほどの寒波が北インドを襲い多くの人の命を奪いました。この寒波による電力需要の増加は慢性的な電力不足と相まって連続10時間を超える停電が昼夜問わずに頻発しました。ただ真っ暗闇での冬の水浴びは私がいかに「恵まれた」社会に生きてきたかを痛感させられる一方で、45度にもなる酷暑(5~6月)の中でこの「恵まれぬ」国の人々が工夫を凝らしながら普段どおり生活していることに人間の力強さや適応能力の高さを感じました。

生活者としての視点を研究に生かす

私が研究テーマとする独立以前の農民運動は、植民地支配や地主による収奪にさらされ、「悲惨な」生活をおくるといって「客観的」な農民像をもとに研究されてきました。しかし当時の農民の日常は絶望だけが満ちていたと考えることに素朴な疑問を覚えます。どの時代の人々もそうした「客観的」な条件に不満をもちつつも、それと持病のようにつきあひながらなんらかの喜びや希望をもって生きる普段の生活があったはずで、その普段の生活を理解したときにはじめて、彼らの考えたことや不満、実際に行動したことの本当の



▲留学先のジャワハルラー
ル・ネール大学

意義を知ることができるのではないかと思います。「民衆」や「大衆」という言葉を使って自らを含む「知識人」から彼らを区別し、その特殊な心理や行動を分析するよりも、自分も例外ではない同じ人間だということを自覚しつつ彼らを観察するほうが、より真実性を担保できると思うのです。

こうした意味で生活者としての視点を養ってくれるこのニューデリーでの日常生活が、今後の研究活動で役立てることができれば幸いです。

【ニュース専修9月号1面】

財産になったボランティア活動 古都・西安(中国)の西北大に留学して 三上浩司(経済学部国際経済学科4年)

他国留学生と協力して集め 貧困地区に古本贈る



▲小学生と一緒に笑顔の三上くん

私は、02年度(平14)の外国留学生として、昨年2月から約1年間、中国西安の西北大に留学しました。

西安は昔、長安と呼ばれ、現在でも歴史的な文化遺産が多く残っています。またイスラム教徒(回族)が多く、シルクロードの基点であったことを実感させられる都市です。経済的な開発面では、内陸部というハンディもあって、沿岸部に後れをとっていました。私の滞在し

た1年間でさえ、見違えるほど発展しました。

私は1年間を通し、大学の語学機関で中国語を勉強しました。しかしその間、教科書の内容だけを勉強したわけではありません。授業の一環として中国の人々に対して、喫煙や就職、身体障害者、開発などの問題についてインタビューを行いました。こうした経験は、語学力の向上だけでなく、中国の文化、習慣の理解にもつながりました。



▲ 陝西省の小学校でのボランティア活動

集めた1万冊を6カ所の村に

今回の留学で一番印象に残っているのは、私とルームメイトの友達、韓国人の3人が発起人となって行った貧困地区に古本を送るというボランティア活動です。そのきっかけは、私たちが陝西省の山間部を訪れたことでした。この活動を行うため、他の留学生に声を掛け、カザフスタン人の総勢12人で、まず手分けして、大学近くの小・中学校で古本を集めさせてくれないかというお願いをして回りました。結局1万冊前後の古本、カバン、ノート、筆記用具などが集まりました。知り合いの中国人の方や新聞記者と協力して、私たちが訪れた村以外にも、合計6カ所の村に古本などを贈ることができました。

具などが集まりました。知り合いの中国人の方や新聞記者と協力して、私たちが訪れた村以外にも、合計6カ所の村に古本などを贈ることができました。

この活動では、常に何らかの障害にぶつかりましたが、社会人の中国の方々と接触することも出来て、また、自分たちの活動が少しでも役に立てたのではないかと思います、とても満足しています。

小学生の笑顔に達成感

古本を届けた先の小学校に、私は「本を読むのは好き？」と聞いたことがあります。答えは「わからない。本がないから」とのことでした。その学校は西安から車で約1時間半の場所にあり、新聞記者の方に寄付地域として紹介されたところ。そんな答えが返ってくるとは思わず、留学も残り1カ月もなかった私にとって、継続してこの活動が出来ないことに悔しさが残りました。でも、目の前に笑顔の小学生がいたので、ひとまずは役に立てたという達成感を得ることができました。

留学では、「結果」というものも必要になってくると思います。事実、私もテストで良い点を取るために、一日中机に向かうことを何週間も続けました。しかし、やはり中国の人たちとの交流の方が、語学に対する自信がついて、その結果として語学力も伸びると思います。そして何より、その留学先でしか得られないものを自分の五感で感じるからこそが、自分の人生の大きな財産になると思います。

私も、この留学で蓄積した「財産」を無駄にしないで、次に生かせるように、頑張ってい

きたいと思います。

【ニュース専修9月号10面】